

岐阜同朋

一枚の寫眞の記憶

- 真宗大谷派南米開教区開教60周年 ●三河の大坊・城郭の寺本證寺
- コラムしょうしんげ ●「救い」とは何か?その3
- 一枚の寫眞の記憶—のすたるじっく・ふおと—

2012.08 108



三河の大坊・城郭の寺 本證寺(境内地)

愛知県安城市野寺町野寺



一枚の寫眞の記憶

—のすたるじっく・ふおと—

巻頭ページ(P2～P3)で既報のように、本年は南米開教区開教60周年であるが、大垣市墨俣町西來寺住職・今井良觀師(旧姓・谷)は、1960

(昭和35)年に南米開教本部書記として渡伯され、開教使就任を経て帰国されるまで13年…。まさに歴史の生き証人のお一人である。

今井師の述懐はさらに続く……。 「……開教使の住まいといっても、部屋の周囲の間仕切りは板造り。木でできたベッドは麻布の袋に乾燥したカヤの草を詰めたもの。長く使っていると南京虫が湧きます。トイレは家から離れたところにあり、5メートルほど穴を掘った井戸状の便壺で、その上に落ちないように踏み板を置いただけのものでした。でもドラム缶のお風呂は意外と快適でした……。」 帰国後、今井師はご夫婦で西來寺に入寺され、今はご法務に、また後進の指導に励んでおられる。

写真は1963(昭和38)年11月、ブラジル別院南米本願寺で行われた、今井師の結婚披露宴での一枚。左から3人目が今井師(新郎)で、その右隣で俯いておられるのが坊守の文子さん(新婦)。またその右は媒酌人の訓覇信雄宗務総長(当時、故人)。当時のご苦労たるや想像に難くないが、その中であつて大変微笑ましい一枚である。



編集後記

先日、生まれた孫のために、住職(父)が庭に記念植樹をされました。ところが、よりによってそれがスギの木だったので。 私たち家族は花粉症に悩んでいるの……。 まっすぐ育てて欲しいという思いからでしょうが、家族からは非難轟々。困った記念植樹となりました。

いつから、人は花粉症に悩むようになったのでしょうか。自然界にもともとあったはずなのに、今ではスギ、ヒノキ。聞いただけで鼻がムズムズします。

しかし、気づけば本堂にもスギ、ヒノキが。 生活の上で木には大変お世話になっているにも関わらず、花粉をまき散らす木は毛嫌いです。 なんとも都合の良い話です。

(慧)

南米開教区開教60周年

真宗大谷派

来る2012年8月25、26日に南米開教区では開教60年を迎えるにあたり、「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌並びに真宗大谷派南米開教区開教60周年法要」がブラジルサンパウロ市ブラジル日本文化福祉協会大講堂で厳修されます。

また、2011年11月に就任いたしました、大谷暢裕開教司教の就任記念として、音楽法要「讃仰の集い」を行うことを予定しております。皆様にもご縁がありましたら是非お参りいただきたと思っております。



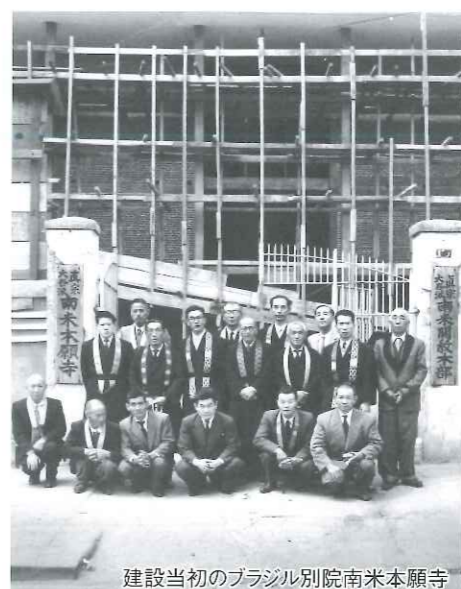
今井良観師・左端

日本からのフラジル移民歴史

1908(明治41)年、第1回契約移民781名が、笠戸丸という船でブラジルへ集団移住しました。コヒー園に分かれて1年毎の契約で働き始めましたが、コヒーの値段の暴落、預けたお金が返らないというトンでもない現実でした。生活習慣の違いもあり、言葉も通じず、法律も知らないで生きていくのは容易ではありませんでした。水が合わなくてひどい下痢、マラリアに罹って死んでいく人もたくさんありました。また、太平洋戦争勃発による日本人移民の取り締まりは厳しく、日本からの移民を追い出す地主もいました。1945(昭和20)年、太平洋戦争は日本の敗戦に終わりましたが、ブラジルにいる移民には正確な情報が伝わりませんでした。移民の中で日本が勝ったと信



じるものと、負けたと認識するものに分かれた。やがて日本の敗戦の事実が伝わるようになり、荒れはた日本の様子を知らされた移民は、ブラジルに永住することを決意せざるを得ませんでした。



建設当初のブラジル別院南米本願寺

して、国民は必ず洗礼を受けました。そのような中で日本人移民は集団で生活することを重要視し、日本人会館を作り、先亡者の追悼法要を行うようになりました。日本人移民の心の支えはやはり仏教でしたので、終戦後疎遠になっていた日本から、仏教の僧侶である開教使が招聘されるようになり、仏の教えが聞けるようになっていきました。

南米フラジル開教

日本人移民がブラジルで生き抜いていく術は、郷愁と日本人同士の結束でした。日本人会、仏教会を結成し、故人の追悼法要、慰霊祭を催し、せめてもの心を慰めてくれるものを求めていました。ブラジルはカトリックを国教と

の勧めで、大谷暢慶連枝が、パラナ州アサイ照真寺に着任、教化活動を展開され、その後アラサツバ・モジダスクルーゼス・ブラジル別院南米本願寺に駐在されました。大谷氏が制作された「三帖和讃聴聞記」・ローマ字かな付きの「仏説阿弥陀経」は南米の方々に大きな影響を与えました。77歳で還

帰された大谷氏のご生涯は、ブラジルに住む世界各国の異なる人種と、共なる人間の一人として念仏の道を歩まれたお姿でありました。

開教使の生活

今井良観・述

わたくしは1960(昭和35)年に南米開教本部書記として着任しました。

ブラジルに着任した開教使は、開教監督の指示に従い各地の開教寺院に駐在します。各地に着任した開教使は、その日からブラ



お寺に集まってきた青年会の人たち

ジルの生活が始まります。日本人移民が集団で生活する町には日本人会、仏教会があり、そこに呼ばれた開教使はその日から用意された住宅に住みます。寺院といつてもカトリックの教会のようなレンガ造りの建物で、そこに本山から下附された御木像と御脇掛けが安置された本堂でした。その本堂で毎月の定例法話、子供会、年中行事を開催していただきました。そこから同朋会も結成されていきました。1964(昭和39)年6月には、第1回地区別同朋運動推進委員研修会が開催され、仏法を聴聞する姿勢が少しずつ育ち、その後は毎年継続し開催されていきました。



第1回地区別同朋運動推進委員研修会 1964(昭39).6.6-8 ツワン南米本願寺

開教使の仕事といえば、日本全国から移民してきた日本人との交流です。多くはコヒー、落花生、大豆、綿栽培の農家でした。寺院内いつてもカトリックの教会のようなレンガ造りの建物で、そこに本山から下附された御木像と御脇掛けが安置された本堂でした。その本堂で毎月の定例法話、子供会、年中行事を開催していただきました。そこから同朋会も結成されていきました。1964(昭和39)年6月には、第1回地区別同朋運動推進委員研修会が開催され、仏法を聴聞する姿勢が少しずつ育ち、その後は毎年継続し開催されていきました。



大谷暢慶氏が着任されたパラナ州アサイ照真寺

三河の大坊 城郭の寺 本證寺

三河の真宗②

三河触頭三ヶ寺として知られ、戦国時代には三河一向一揆の拠点となった本證寺の壮大な姿にまずは圧倒される。境内は二重の堀と土塁に囲まれるなど城郭的防備に主眼を置いた伽藍配置になっており、「城郭寺院」「城郭伽藍」とよばれる。現在では二重の堀のうち外堀は一部を残して埋まってしまいい内堀だけが現存している。

本證寺は、鎌倉時代にこの地に滞在していた親鸞聖人に帰依し真宗に帰順した慶円によって開基され、蓮如上人の三河御下向により本願寺に帰参した。三河は本願寺七世存如までは専修寺教団



尾平野一帯に教線をひろげた。またこの寺は、三河に真宗を広め発展させたばかりではなく、真宗そのものを支え続けた。三河の地に仏教の新風が吹き込まれると、開基の慶円は、念仏の教えをすすめるために聖徳太子絵伝、善光寺如来絵伝等を苦心して作成し、魅力的な顔で、透る声で、わかりやすく話し、男性だけではなく、女性信者をも獲得していった。



ほんしょうじ 愛知県安城市野寺町野寺

文・編集委員会



それらの末寺から本證寺に納められる金品、そして近辺でとれる米に徳川家康が目をつけ宣戦布告され、徳川家との戦いへと。家康と対立して一向一揆をおこし岡崎城を攻めるが敗れ、その後20年間三河の国では真宗が禁制となった。

しかし、禁教令も解かれ寺復興の許可が下りてからは、家康とも和解し真宗復興へと力を注いでいった。教えを受け継ぐ歴代の住職は、三河一向一揆の家康の卑劣な弾圧によって真宗崩壊危機にあい、その後は争わない、権力と対峙しないで組織力をもって命がけて真宗と門徒を守り、教えをひろめる道を伝え続けた。

さて、この寺の現在の住職は風貌も声にも人を引きつける不思議な力を持っている。話術にも長けている人間的魅力を感じる方だ。「坊主には、二つの大切なものがある。一つは顔。もう一つは声。」と言われる言葉には説得力がある。「精悍な顔で節を付けないが話をすると、信者がいっぱい付いてくる。」と笑みをのぞかせながら話はさらに、

- 教えはしっかりと学び、できるだけわかりやすく伝えること。
- 話術を磨くこと(飽きさせない、楽しませる)。
- 人を引きつける(魅力的な)声を出すこと。
- 権力(政治)と対峙せず協力しあうこと。
- 絵(ビジョン)をうまく利用すること。
- 組織力を持つこと。



と続けられた。まさに貧乏で弱小な本願寺教団を戦国武将も恐れる数百万の教団につくり変えた蓮如を連想させる。



自己と向き合い続けた孤高の宗教者親鸞や西方寺の清沢満之(前号参照)とは対照的で、大衆と共に生きる布教者蓮如や本證寺の慶円。その生き方は一見対峙するが、人々の心に安穩を願い、仏の教えを伝えようとした生き方にはともに違いはなく、今も三河の地に脈々と引き継がれている。
*敬称は略させていただきました。



しょうしんげ

我亦在彼摄取中 煩惱障眼雖不見

(私もまた願いの光の中に包んでいたでいており) (煩惱が眼さえぎって光を見ることができないが)

源信僧都

どんないのちも阿弥陀仏の本願の中しっかりと撰め取られているという、いのちの根源的な事実。しかしながら認識しているだけで身が頷かない。

私の身の上に次から次へと起こってくる不都合な経済的問題、対人関係、家族の問題等の中で、撰め取って捨てられることのないいのちの根源的な事実を自分自身で見えなくしてしまっているところか、自我を根拠としていのちの根源的な事実に逆らって生きているのが私の姿である。

源信僧都が撰取の中に身を置いているという事実と、その事実を見たてまつていないという自分の現実の身を、誤魔化さずに食い違いを直視なさっているお言葉が私には響いてくる。

1 経教は私たちの姿を映し出す「鏡」
—王舎城の悲劇を機縁として—

草提希夫人が釈尊との出会いを通して「阿弥陀の浄土に生まれる」と願う、凡夫であることを自覚し救われていく姿が「仏説観無量寿経」に説かれます。

また、息子阿闍世が父を殺した罪を深く懺悔し、救われし者の覚悟と責任を果たしていく姿が「涅槃経」に説かれていきます。

「救い」とは何か? その3

「岐阜同朋」編集委員
尾畑英和



王舎城 (者闍嶮山)

それでは、息子に幽閉され殺害された父類婆娑羅王は救われたのでしょうか。幽閉された後、父王は、仏弟子の目連に八戒を授けられ、尊者富楼那によって法を説かれ、安らかな境地に至ったことを「顔色和悦」と経典は伝えていきます。亡き後の父王は、自分を殺害したことを悔い悩んでいる息子阿闍世に虚空から「善婆の勧めに従い釈尊の所に行きなさい」と進言します。草提希や阿闍世が救われて立つべき大地と歩むべき道が決定することが父類婆娑羅王の救いであったと言えるでしょう。

事件の発端を招いた提婆達多は救われるのでしょうか。提婆は、戒律について非常に厳格な考え方を持っていたようです。一方で釈尊はどんなに正しい考えでも極端な考え方や一方に偏った考えは退けられたと言われています。

そんな釈尊の教団運営に常日頃から不満を持ち、父の古い国家経営に不満を持つ阿闍世を国王にし、自らは教団のリーダーとなり、共に手を取り「王国」と「教団」を支配する野望の実現を目指します。そして阿闍世に近づき出生の秘密(未生怨)を明かすのです。仏教では、釈尊を教団から追放し僧伽の主君に臨しようと図った罪は、「破僧罪」として、阿闍世が父王を殺害した罪を超える「五逆」の大罪として強く戒められています。しかし、後に釈尊は、極悪人であるはずの彼を提婆尊者(衆生を真実に導いた尊い方)と呼び、天王如来になるという未来成仏が「法華経」に説かれています。

王舎城の悲劇とそこに展開する人々の姿は、「憂いを取り除こうとすることが新たな憂いを生んでいく」という因果の道理を、今を生きる私たちに示してください。善導大師は草提希夫人らを「実業の凡夫」と了解されましたが、宗祖親鸞聖人は彼らを「権化の仁」(菩薩が衆生を救わんがために慈悲の心をもって仮に姿を変えてこの世にあらわれること)とただかれます。草提希、阿闍世を中心とした登場人物すべての方々の導きによって凡夫救済の道が示され、「願生浄土の仏道」が開かれたとただかれています。



王舎城 (者闍嶮山)

2 善鸞義絶と「報恩の念仏」

如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし
(正像末和讃・恩徳讃)

恩徳讃です。本願と念仏の歴史を通して自己の信仰の道を見出され、そのことを「仏恩」といってただかれた方が宗祖親鸞聖人です。宗祖晩年84歳の時、関東教団の乱れと長男善鸞義絶事件という大変な事態が起こります。誤った信心を正すために京都から関東へ送られた長男善鸞は、あろうことか十八願本願を「しほめる花」に喩え、「私だけが夜に父から真実を伝え聞いている」

と関東の門弟を惑わせたのです。この罪は親鸞聖人にとって赦すことのできない大罪でした。「破僧罪」であり五逆の大罪であり父を殺すことだと激しく非難し、「いまは、おやということあるべからず、ことおもうことおもいきりたり。」と半身を切り裂く思いで父子の縁を絶つていかれます。また、門弟性信に宛てた手紙の中で、往生の信心について、善導大師の言をお引きになり、「まことの信をさだめられてのちには、弥陀のごとくの仏、釈迦のごとくの仏、さらにみちみちて、釈迦のおしえ、弥陀の本願はひがごとなりとおおせらるるとも、一念もうたがいあるべからず」と示し、「善鸞ほどの申すことに惑わされては、みな信心が本当でないことが明らかになったことです。これは良いことでもあります。」と門弟たちに手紙を書き送り、正しい信心をいただくことがなにより大切であることを検めて示されました。

無慚無愧のこの身にて
まことのこころはなけれども
弥陀の回向の御名なれば
功徳は十方にみちたまう
(正像末和讃・愚禿悲嘆述懐)

親として、ひとりの人間として、罪深い自身の凡愚性を深く見つめていかれた方、その悲しみと向き合うことから揺るぎない本願の確かさを感得なさった方が親鸞聖人です。「念多念文章」、「尊号真像銘文」、「正像末和讃」等々、最晩年、

弥陀の本願信ずべし
本願信するひとはみな
摂取不捨の利益にて
無上覚をばささるるなり
(正像末和讃・夢告和讃)

「弥陀ヲタノム」というもどかしいほどの確かな事実は、弥陀の本願にふれてこの身のまま救われていくということなのです。宗祖親鸞聖人が90年の生涯をかけて明らかにしてくださったのはただこの一点に尽きるのです。